石川 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No.136
2021.8.24

石川県立歴史博物館開館35周年記念 | 令和3年度秋季特別展

徳川美術館展 | The Tokugawa Art Museum Collection Treasures of the Owari Tokugawa Family

尾張徳川家の至宝

国宝　源氏物語絵巻　東屋（一）　平安時代（12世紀）　徳川美術館蔵

令和3年（2021年）10/9（土）–11/23（火・祝）

大名文化の最高峰　尾張徳川家

石川県立歴史博物館開館35周年記念｜令和3年度秋季特別展

徳川美術館展 | The Tokugawa Art Museum Collection Treasures of the Owari Tokugawa Family

尾張徳川家の至宝

令和3年（2021年） **10/9（土）－11/23（火・祝）** 9:00～17:00【展示室への入室は16:30まで】

前期 10月9日（土）～10月31日（日）　**後期** 11月2日（火）～11月23日（火・祝）　※11月1日（月）は展示替えのため閉室

■ **観覧料**
前売り・団体　一般／1,100円　中高生／700円　小学生／500円
当　　日　一般／1,300円　中高生／900円　小学生／700円
未就学児童は無料、団体（20人以上）は前売り料金／65歳以上は前売り料金
障がい者手帳等お持ちの方と介添え人1人まで無料　＊常設展は別途料金

■ **主　催**　「徳川美術館展　尾張徳川家の至宝」金沢展実行委員会（石川県立歴史博物館・石川テレビ放送）
■ **特別協賛**　株式会社クスリのアオキ　■ **協賛**　日本通運株式会社
■ **特別協力**　徳川美術館　■ **協力**　北陸中日新聞

展覧会および関連イベント情報は、公式ホームページをご覧ください　**混雑状況によっては、入場制限をする場合がございます。**

特別公開　国宝「源氏物語絵巻」

国宝　源氏物語絵巻　竹河（二）　平安時代（12世紀）

紫式部があらわした『源氏物語』は、完成後ほどなくして絵画化が進みます。名古屋の徳川美術館に伝わる尾張徳川家伝来の３巻、東京の五島美術館に伝わる阿波蜂須賀家伝来の１巻は平安時代（12世紀）に成立したとみられる現存最古の「源氏物語絵巻」です。美しい色彩と細やかな筆遣いにより描かれた絵、平安時代の美意識を伝える詞書と料紙からなる本絵巻は、見る者に深い感動を与えてきました。

このたび平成28年（2016）から５年間にわたる修復を終え、額面装から元の巻子装へ戻されました。本絵巻の模写は、江戸時代から行われてきましたが、最近では同15年から７年間にわたり、東京藝術大学日本画第三研究室で絵・詞書ともに現状模写が行われ、復元模写は同11年の林功氏の模写を皮切りに、同17年には徳川美術館・五島美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」の絵の模写が行われました。

本展では、大切な文化財を後世に伝える取り組みとして、修復事業の一端もご紹介します。

※作品保護のため、会期中に展示替えを行います。

源氏物語絵巻の展示替え予定

◆**国宝　源氏物語絵巻　竹河（二）**
10/9（土）～10/24（日）

◆**国宝　源氏物語絵巻　東屋（一）**
11/8（月）～11/23（火・祝）

10/25（月）～11/7（日）は復元模写・現状模写の展示となります。

ゆかりの名品が一堂に！

尾張徳川家は徳川家康の九男・義直（1600–50）を初代とする御三家筆頭の大名家です。名古屋の徳川美術館は、義直が受け継いだ家康の遺産「駿府御分物」を中核とする尾張徳川家の伝来品などの保存・公開を目的に昭和10年に開館しました。多くの大名家の伝来品が戦災などにより失われる中、保存状態のよい大名道具をまとまった形で保有する国内随一の美術館です。

本展では、尾張徳川家の成立を伝える史料、武家の象徴ともいえる武具、武家の格式をあらわす茶道具や香道具・能装束、大名の教養として求められた書跡・絵画、贅を尽くして作られた婚礼調度など、徳川美術館の名品の魅力を余すことなくご紹介します。また、徳川美術館以外では、巻子装への修復後初公開となる国宝「源氏物語絵巻」も期間限定で公開します。

徳川家康画像（東照大権現像）模本　桜井清香模写（部分）　昭和12年（1937）

作品紹介

脇指　銘 吉光　名物　鯰尾藤四郎

鎌倉時代（13世紀）

山城国粟田口派の刀工・藤四郎吉光の作。織田信雄・豊臣秀吉・豊臣秀頼をへて、徳川家康の手に渡った。家康の遺産分与に際し、「駿府御分物」として義直に伝わった脇指である。

注目ポイント　大坂夏の陣で豊臣家が滅亡した際、秀頼が所持していたため大坂落城とともに焼けてしまいました。焼けたままでは惜しいと感じた家康が初代越前康継に焼き直させ、尾張徳川家に伝来しました。

滕王閣図

遠坂文雍筆　江戸時代（19世紀）前期展示

現在の中国・江西省南昌の西南に建てられた唐時代の楼閣・滕王閣を描く。江戸画壇の大家・谷文晁の弟子で田安徳川家に仕えた遠坂文雍の作。

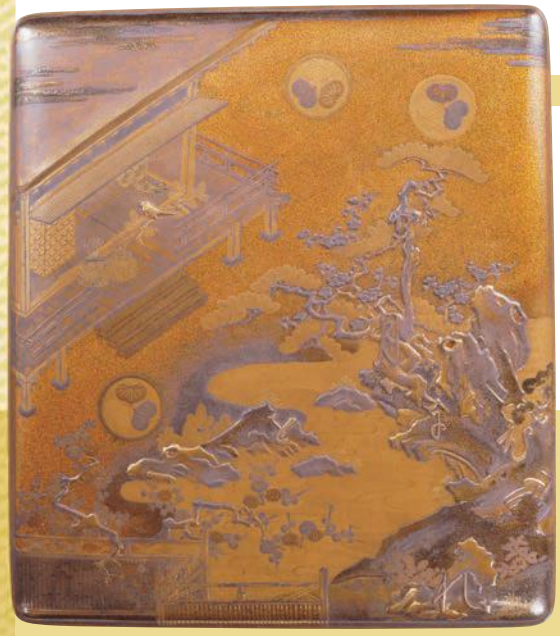
注目ポイント　群青・緑青・代赭などを用いた極彩色の山水図を青緑山水図といいます。かなりの大幅ですので、13年ぶりの展示です（徳川美術館以外では初公開）。精密に描き込まれた楼閣の表現、重厚な岩や樹木の表現にご注目ください！

部分拡大

初音蒔絵眉作箱

寛永16年（1639）　国宝　前期展示

三代将軍徳川家光の長女・千代姫の婚礼調度のうち、女性が眉や額を化粧するための化粧道具。幕府の御用蒔絵師・幸阿弥家十代長重の工房が３年近くの歳月をかけて製作した。金銀・赤珊瑚をふんだんに用い、日本の最高峰の漆工技術を駆使した名品である。



蓋表部分

注目ポイント　初音調度は『源氏物語』の「初音」の帖「年月を松にひかれてふる人に今日鶯の初音きかせよ」の歌意を全体の意匠とし、その歌の文字を葦手書に散らしています。蓋表には「とし月を（松は絵で表現）にひかれ」の８文字があらわされています。

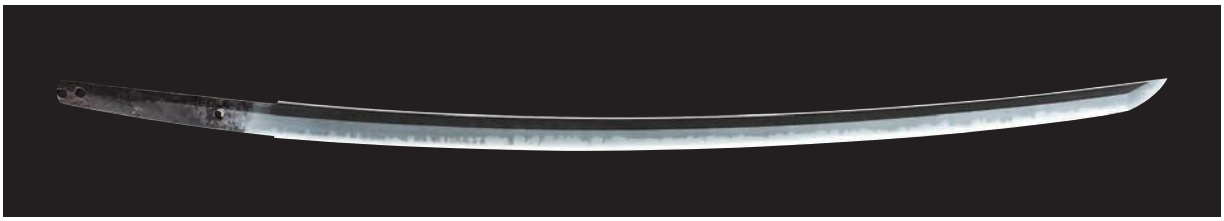
部分拡大

資料紹介

津田重久

― 天下の名刀「津田遠江長光」を加賀前田家にもたらした男 ―

学芸主任　塩崎　久代



太刀　銘　長光　名物　津田遠江長光　鎌倉時代（13世紀）　国宝

秋季特別展「徳川美術館展 尾張徳川家の至宝」の開催にあたり、徳川美術館のコレクションの中から加賀前田家ゆかりの名品を特別にご出陳いただく。

なかでも注目の作品の一つが国宝の太刀「津田遠江長光」だ。備前鍛冶の流派の一つである長船派の祖である光忠の子・長光の作で、鎌倉期の備前刀らしい剛健な姿、丁子乱れの華やかな刃文に名だたる武将たちが魅せられてきた。八代将軍吉宗の命により編まれた『享保名物帳』の記述によれば、かつては織田信長の愛刀であったが、明智光秀が本能寺の変後に安土城の宝蔵から奪い、家老の津田重久に褒美として与えたという。重久は後に豊臣秀次の家臣となり、秀次が高野山で自刃した後は加賀前田家二代利長に仕え、元和２年（1616）に光秀から拝領した太刀を三代利常に献上したとされる（「津田家系図」、金沢市立玉川図書館蔵）。加賀前田家五代綱紀が五代将軍綱吉に献上するまで、この太刀は前田家が所有していた。その意味で、本展は「津田遠江長光」の里帰り展でもある。

津田重久は天文18年（1549）に山城国伏見で生まれ、永禄年間（1558-70）以降、三好家、細川家、三淵家、足利将軍家に仕えた。明智光秀に仕官した年代については諸説あるが、天正年間（1573-1592）の初めには光秀に仕えて近畿・北陸に従軍し、本能寺の変では先鋒となり力戦したという。さらに山崎の合戦でも先鋒となり奮戦するも敗れ、高野山に落ち延び、天正11年（1583）には豊臣秀吉から近江国と河内国において1200石の領地を与えられ尾藤知宜付となり、尾藤の失脚後、豊臣秀次、前田利長と主君を変えた。重久は秀次に仕えていた文禄３年（1594）７月17日に従五位下・遠江守に叙任され、豊臣姓を名乗ることを許された（「柳原家記録資勝符案」）。

山崎の合戦で敵対した武将でありながら秀吉に召し出されるなど、重久はたびたび主君を失いながらも再仕が叶っており、秀次失脚後の慶長元年（1596）には、伊達政宗・福島正則・細川藤孝らからの仕官の誘いを断っている。こうした経歴から、重久が有能な人物として一目置かれていたことがうかがえよう。

同年８月12日、重久は48歳で前田利長に仕え、越中国内で合力米4000俵を与えられ（翌年、1000石加増）、関ヶ原合戦直前の同５年８月には利長とともに山口宗永の大聖寺城を攻め、首を一つ取った。重久が利長の使いとして前田軍の先鋒隊に向かう際、佐久間新五左衛門により鉄砲で左の太腿を撃ち抜かれるも落馬せず役目を果たしたという逸話は、金沢を訪れた新五左衛門の親類・覚左衛門が語ったものである。重久は、褒美として越中国氷見地内で750石を加増され、同７年には大聖寺城代に任じられ、翌年には加賀国江沼郡内で1500石を加増された。同15年に62歳で隠居し、同19年の大坂冬の陣では利常の本陣において作戦計画の立案に参加、翌20年の大坂夏の陣では大聖寺城の城番をつとめた。戦後、重久は入道して道供と名乗り、放生寺（曹洞宗）を再興し、仏道三昧の日々を送ったという。重久自身が寛永６年（1629）に書き上げた「首数之覚」（富山市郷土博物館蔵）によれば、生涯で挙げた首数は19、褒状は４通であった。知恵と武勇に優れ、天下の名刀を手に入れた重久は、同11年に86年の生涯を閉じた。

放生寺（金沢市）の開基・津田重久の坐像

学芸員コラム
Column

広報を通して学ぶ石川の魅力

学芸員　吉田　朋生

歴史博物館に勤め始めて、早くも4ヶ月が経ちました。３月まで北海道民だった私にとって、金沢での生活は学びの連続です。配属になった学芸課では、特別展の準備をお手伝いする中で、展示がどのように出来上がるのかを学んでいます。石川の歴史についても、担当している近世・江戸時代を中心に日々勉強中です。その手助けとなっているのが当館の広報用Twitterです。これは、140字以内の文章に写真を添え、Web上で石川県の歴史や文化を発信しているもの。月に数回、投稿の当番が回って来るのに備えて、通勤途中などに博物館周辺の魅力的なスポットを探しています。今回は、これまで投稿した題材の中から、２つの場所をご紹介します。

最初の投稿は、金沢城の西側方面を流れる犀川と、その両岸に咲く桜並木でした。故郷の北海道では桜の開花が４月末～５月上旬のため、３月に咲く桜に感動したことを覚えています。Twitter

犀川の桜並木は金沢の名所の１つ

に投稿する際には、出来るだけ江戸時代との接点を探るようにしています。例えば、写真の奥に小さく見えている犀川大橋。当館の常設展示の近世コーナーには、江戸時代の犀川大橋から片町周辺の町並みを再現した模型があります。この模型は、江戸時代後期に描かれた『金沢城下図屏風』を基に制作されたものです。現在も人々で賑わう片町周辺ですが、江戸時代の頃も町人の暮らしの中心地でした。身近な場所から、江戸時代との連続性が感じられるのも石川の魅力です。

次に、金沢に住み始めて印象的なのが、坂道が多いということです。北海道にも小樽や函館などの坂が多い街がありますが、金沢にも同様の魅力を感じます。歴史博物館がある小立野台地にも、代表的な坂がいくつかあります。通勤時に利用している大乗寺坂がその１つです。写真は、雨上がりの夕方に撮ったもの。天候によって表情が変化する風情のある坂です。

夕焼けに染まる雨上がりの大乗寺坂

大乗寺坂がその名で呼ばれるのは、江戸時代のはじめに大乗寺がこの付近にあったためだと言われています。この坂の名前は、江戸時代の記録にも登場します。加賀藩の町奉行などを勤めた津田政隣が著した『政隣記』には、寛政11（1799）年の大地震の際に、大乗寺坂の家々が転落してしまったことが記されています。現在でも息が切れるほどの急斜面。江戸時代の頃も変わらなかったのでしょう。金沢には他にも魅力的な坂が沢山ありますので、またご紹介できればと思います。金沢の坂巡りも面白いかもしれません。

今回は、江戸時代の面影が残る城下町金沢を中心にご紹介しました。今後は県内の金沢以外の地域にも足を運び、その魅力を発信していきたいと思います。現在、観光名所となっているようなスポットをご紹介する中で、近世・江戸時代を身近に感じて頂けたら幸いです。

研究ノート

小田中親王塚古墳と大入杵命墓

学芸専門員　三浦　俊明

小田中親王塚古墳は、中能登町小田中に所在する古墳時代の円墳である。この古墳は明治８年（1875）に大入杵命の墓に治定され、現在、宮内庁によって管理されている。大入杵命は、『古事記』に第10代崇神天皇の皇子で、能登の古代氏族、能登臣の祖と記される。また、『先代旧事本紀』の「国造本紀」には、大入来命の孫の彦狭嶋命を能等国造に定めたとの記載がある。古墳時代の遺跡から被葬者の名を記した墓誌が見つかることはなく、古墳に誰が埋葬されたのかを解明することは難しい。ここでは、親王塚古墳の特徴と大入杵命墓に治定された明治時代の関連史料を紹介したい。

一、小田中親王塚古墳とその出土品

小田中親王塚古墳は、羽咋から七尾へのびる邑知地溝帯の中央部の南側にあり、石動山系の山麓に立地する。邑知地溝帯とその周辺は県内で古墳の多い地域の一つで、中能登町には約600基の古墳があり、県内の市町のなかで面積あたりの古墳の数が最も多い。親王塚古墳は大規模な円墳で、平成23～24年に宮内庁が行った測量調査によると、墳丘の規模は径65m、高さ14mを測る。墳丘は途中に２つの平坦面をはさんで３段に造られ、頂上に径21mの平坦面がある。親王塚古墳の北西側には、長さ62mの前方後方墳である小田中亀塚古墳が隣接して築かれている。

親王塚古墳の出土品として、白久志山御祖神社で所蔵されている銅鏡（三角縁神獣鏡）１面と管玉１点が知られている。また、付近から出土したとされる腕輪形石製品（鍬形石）の破片１点が宮内庁に所蔵されている。これらの出土品や墳丘の形態から、親王塚古墳と亀塚古墳は、古墳時代前期の中頃～後半（４世紀）に築造されたと推定できる。邑知地溝帯の北側の眉丈山には雨の宮古墳群（国指定史跡）があり、同じ時期に同規模の前方後方墳（１号墳）と前方後円墳（２号墳）が造営されている。邑知地溝帯をはさんで南北に対峙するような位置に能登の有力首長墓が並び立つ状況にあったことになる。

小田中親王塚古墳

二、親王塚の古記録と大入杵命墓の治定

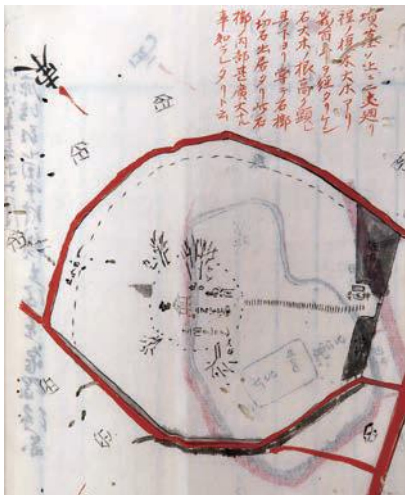
親王塚古墳は、古くからその存在が知られてきた。『平家物語』には、寿永（じゅえい）２年（1183）に木曽義仲が陣をとった「能登の小田中新王の塚の前」の記述があり、この塚は親王塚古墳とみられている。また、江戸時代の地誌や紀行などにも「親（新）王塚」の記載を見ることができる。宝永（ほうえい）元年（1704）の新王塚の由来書（岡部家文書）には、唐土に漂着してその地の帝王の姫と結ばれ、亀に乗って帰郷した太郎という人物が築いた塚とする伝説が記されている。江戸時代には親王塚古墳の墳頂部に「親王社」と呼ばれた小社があり、祭神として大入杵命が祀られていた。「親王」の名称の由来について、大入杵命の墳墓とする説のほかに、能登内親王（奈良時代の光仁（こうにん）天皇の皇女）との関係を考える説も江戸時代に唱えられていた。

天皇陵の考証や比定は江戸時代から盛んに行われてきたが、明治維新の後、政府は天皇以外の皇族の陵墓を治定するためにその捜索を始めた。明治４年（1871）２月に出された太政官布告では、全国の府・藩・県に対して后妃・皇子・皇女等の陵墓の調査と報告が命じられた。『加越能三州后妃皇子等御陵書上』（金沢市立玉川図書館蔵）は、太政官布告を受けて、同年５月に金沢藩の管内各所から藩庁へ提出された報告の写しである。この中に親王塚の記述と絵図があり、治定前の古墳の様子をうかがえる。

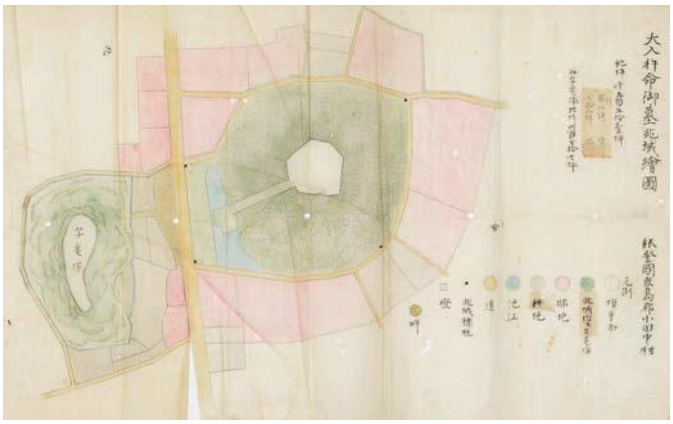
『加越能三州后妃皇子等御陵書上』によれば、親王塚は高さ８間（約14m）、墳頂部の径12間（約22m）で、150年前の墳丘規模は現状とほぼ同じであることがわかる。絵図には、方角に誤記があるが、墳丘の周囲の南～西側に空堀がめぐり、北西側には２つの水堀が描かれている。この堀は古墳築造当初の周壕（しゅうごう）を反映していると考えられ、今もほぼ同じ形状で残っている。古墳は治定前後で大きく改変されることなく、現在まで本来の墳丘が遺存しているとみてよいであろう。

絵図には、墳頂部に親王社の小さな社殿があり、２つの水堀の間から墳頂部に至る参道が描かれる。社殿の前には、樫の根元に「穴口」の文字が書き込まれている。さらに、「大木の根の下よりかつて石槨（せっかく）の切石が出て、石槨の内部は甚だ広大であることが知られたと云う」との注記がある。宝永元年の旧跡調書によると、穴の口が４尺（約120cm）で、上に３尺（約90cm）四方の石の蓋があったという（森田柿園『能登志徴』）。江戸時代には、墳頂部の地下にあった石槨が開口していたとみられ、そこから銅鏡と管玉が出土したと伝えられることから、石槨は古墳の埋葬施設と考えられる。蓋石に覆われた内部に広い空間があったとすれば、埋葬施設は竪穴式石槨であった可能性が高い。古墳時代前期の竪穴式石槨は近畿地方を中心に分布しているが、北陸地方では希少な埋葬施設である。

『大入杵命御墓兆域絵図』（当館蔵）には、明治８年に治定された後の兆域（墓域）が描かれている。親王塚古墳の周囲には兆域の四方を示す標柱が書き入れられ、左側（北西側）には付属する飛地になった亀塚古墳も描かれる。治定後に親王社の社殿は取り払われ、石槨は埋め戻されており、この絵図にそれらは見られないが、墳頂部に登る参道が残っている。後にこの参道も撤去されたようで、昭和初期の測量図に参道は見られない。２つの水堀の間にあった参道の入口は、治定後に大入杵命墓の拝所に造り替えられている。この絵図は、小田中村で祀られていた親王塚が陵墓として整備されていく様子を伝えている。



加越能三州后妃皇子等御陵書上
（金沢市立玉川図書館蔵）



大入杵命御墓兆域絵図（当館蔵）

催し物案内 Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします

9月　休館日：9/13(月)～14(火)

4日(土)　れきはくゼミナール
「加州刀工・清光の伝承を追って」
講師：大井 理恵

10日(金)　いしかわ歴史講座
「神々をもてなす
—いしかわの神饌文化と来訪神行事—」
講師：大門 哲

18日(土)　れきはくゼミナール
「大規模御殿装飾復元
—首里城・名古屋城を例として—」
講師：鶴野 俊哉

24日(金)　いしかわ歴史講座
「松楓殿コレクションにみる日本近代工芸」
講師：鶴野 俊哉

10月　休館日：10/7(木)～8(金)

9日(土)　「徳川美術館展 尾張徳川家の至宝」展示解説
講師：薄田 大輔 氏
(徳川美術館学芸員)

16日(土)　れきはくゼミナール
「前田光高・大姫の縁組と婚礼調度」
講師：塩崎 久代

22日(金)　いしかわ歴史講座
「祭りの国・いしかわの祭礼風流」
講師：大井 理恵

24日(日)　「徳川美術館展 尾張徳川家の至宝」記念講演会
「国宝　源氏物語絵巻の魅力」
講師：吉川 美穂 氏
(徳川美術館学芸部部長代理)

30日(土)　れきはくゼミナール
「加賀藩の巡見と絵画」
講師：中村 真菜美

11月　休館日：11/24(水)～25(木)

7日(日)　「徳川美術館展 尾張徳川家の至宝」展示解説
講師：吉川 美穂 氏
(徳川美術館学芸部部長代理)

12日(金)　いしかわ歴史講座
「長谷川等伯と妙成寺」
講師：北 春千代

20日(土)　れきはくゼミナール
「前田家から
徳川将軍家への贈り物(仮)」
講師：吉田 朋生

26日(金)　いしかわ歴史講座
「石川の美術工業
—海のむこうを夢見て—」
講師：中村 真菜美

12月　休館日：12/28(火)～31(金)

1月　休館日：1/1(土)～3(月)

14日(金)　いしかわ歴史講座
「特産品から読み解く江戸時代
—加賀藩の産物方政策—」
講師：吉田 朋生

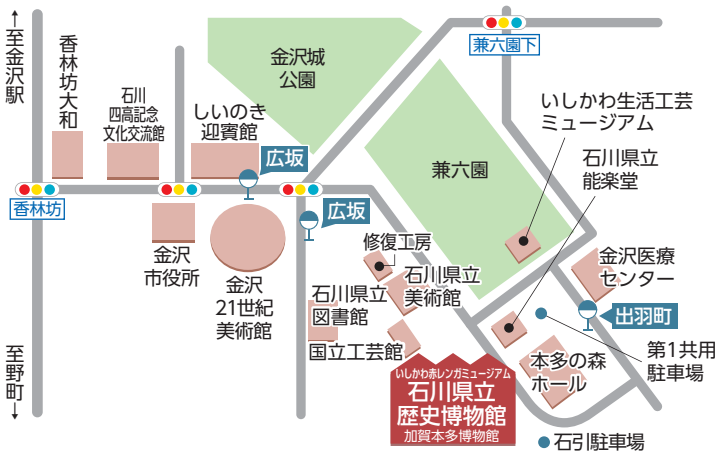
22日(土)　れきはくゼミナール
「能登天領の成立と変遷」
講師：濱岡 伸也

記念講演会「国宝 源氏物語絵巻の魅力」
無料 要事前申込

「徳川美術館展 尾張徳川家の至宝」展示解説
＊COVID-19の感染状況に鑑み、詳細を決定いたします。期日が近づきましたら公式ホームページ等でご案内いたします。

いしかわ歴史講座
毎月1～2回、金曜日に実施。当館学芸員が、常設展示の内容を中心にお話します。
受講無料 当日先着順 全12回

れきはくゼミナール
毎月1～2回、土曜日に実施。当館の学芸員が独自のテーマを設定し講義します。
受講無料 当日先着順 全12回



いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL：076-262-3236　FAX：076-262-1836
E-mail：rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/

広告
石川県立歴史博物館「石川 れきはく」に広告を掲載してPR サービス・集客 しませんか？
れきはくメイト(友の会)会員、学校、博物館、図書館、その他公共施設へ 配布!!
ターゲットを狙った知名度向上
石川県立歴史博物館の信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは 株式会社ホープ ☎092-716-1401
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索